

報告

薬剤師の病棟配置は医師・看護師の業務負担を軽減させるか：医師・看護師を対象としたアンケート調査

吉井 圭佑^{1,2)}, 原 (野上) 愛³⁾, 見尾 光庸^{1,3)}, 杉山 哲大²⁾

¹⁾ 就実大学大学院医療薬学研究科, ²⁾ 津山中央病院薬剤部, ³⁾ 就実大学薬学部

Survey for medical doctors and nurses regarding the performance of inpatient pharmaceutical services

Keisuke Yoshii^{1,2)}, Ai Nogami-Hara³⁾, Mitsunobu Mio^{1,3)}, Tetsuhiro Sugiyama²⁾

¹⁾ *Graduate School of Clinical Pharmacy, Shujitsu University*

²⁾ *Department of Pharmacy, Tsuyama Central Hospital*

³⁾ *School of Pharmacy, Shujitsu University*

(Received 15 November 2018; accepted 7 January 2019)

Abstract: We conducted a survey for medical doctors and nurses regarding the performance of inpatient pharmaceutical services in order to research the appraisal by other medical professionals in the pharmacist's ward activities. The questionnaire included evaluations of the performance by pharmacists and analyzing how they co-work with pharmacists in clinical situation. Results showed that positive evaluation was obtained in general in ward activities by pharmacists. It became clear that the fields required by the doctors to pharmacists were different from those required by the nurses after analyzing what they asked items concerning medicines to pharmacists. There were inter-professional differences among opinions of doctors and nurses in prescription confirmation with route managements, mixing and mixing preparation within medicine-related task. Based on the present results, it is expected that pharmacist's ward activities are improved by filling such deviations.

Keywords: ward pharmacist, inpatient pharmaceutical services, survey for medical doctors and nurses, questionnaire

緒言

病棟薬剤業務加算が平成24年4月に新設されて以来、多くの病院で病棟に薬剤師が配置され、

チーム医療の一員として薬物治療や管理を担っている。

津山中央病院（以下、当院）は、岡山県北部に

位置する地域の基幹病院である。当院では、2015年4月より全病棟数12に1病棟1名の薬剤師を配置し、病棟薬剤業務加算算定をすることとなった¹⁾。

これまでも当院以外の多くの病院において、病棟薬剤師の業務に対する医師・看護師の意識や評価に関する調査がなされてきており²⁻⁴⁾、薬剤師による病棟常駐の必要性や潜在的ニーズが調査されてきた⁵⁻⁷⁾。

真野ら²⁾は、医師・看護師を含む病棟スタッフから薬剤師に対して寄せられた質問と、質問に対する回答によって生じた薬学的関与事例について分析した。その結果、医薬品に対する質問に回

答することで生じた薬学的介入は、病棟に薬剤師が存在したから発生した事象であり、病棟薬剤師の存在意義を示すものであるとした。

吉田ら³⁾は、医師・看護師・薬剤師に対するアンケート調査を実施し、種々な薬剤関連業務について、どの医療職種が行うべきかを尋ね、職種間の意識の違いや、新たな薬剤師業務として望まれるものについて論じていた。

当院では以前から部分的な病棟業務を行っていたが、本格的な薬剤師の病棟配置開始から数ヶ月が経過したことから、病棟薬剤業務が医師・看護師の負担軽減に繋がっているのかを分析し、今後どのような活動が必要とされているかを明ら

病棟薬剤業務に関するアンケート

Q. 職種をお答え下さい。
 医師 看護師

Q. 当院所属年数をお答えください。(年)
 Q. 職業経験年数をお答え下さい(年)

Q. 病棟薬剤業務実施加算についてご存知ですか?
 知っている 知らない

Q. 病棟に薬剤師が配置されていること(病棟薬剤師)をご存知ですか?
 知っている 知らない

【知っている」と答えた方に質問です】

Q. 病棟薬剤師に薬物に関して相談・質問をしたことはありますか?
 ある ない

Q. 病棟薬剤師に薬物以外に関して相談・質問をしたことはありますか?
 ある ない

Q. 相談した内容、質問した経験のあるものをお答え下さい。(複数回答可)

<input type="checkbox"/> 用量	<input type="checkbox"/> 内服(投与方法)	<input type="checkbox"/> 薬効・薬理	<input type="checkbox"/> 禁忌
<input type="checkbox"/> 用法	<input type="checkbox"/> 注射(投与方法)	<input type="checkbox"/> 副作用	<input type="checkbox"/> 相互作用
<input type="checkbox"/> 保存方法	<input type="checkbox"/> 注射(ルート管理)	<input type="checkbox"/> 薬物動態	<input type="checkbox"/> 中止薬
<input type="checkbox"/> 持参薬	<input type="checkbox"/> 内服(別包装指示)	<input type="checkbox"/> 血中濃度	<input type="checkbox"/> 薬剤選択
<input type="checkbox"/> 抗癌剤	<input type="checkbox"/> 内服(一包化指示)	<input type="checkbox"/> 注射(配合変化)	<input type="checkbox"/> レセプト
<input type="checkbox"/> 麻薬	<input type="checkbox"/> その他()	<input type="checkbox"/> 注射(溶解方法)	<input type="checkbox"/> 健康食品
			<input type="checkbox"/> 血糖測定器

Q. 病棟薬剤師の配置は、工作上において負担軽減となっていますか?
 なっている なっていない

Q. 薬剤師が病棟で仕事をする時間はどれくらい必要と考えていますか?

Q. 病棟薬剤師が不在の際は、どのようなツールで解決しますか?(複数回答可)

<input type="checkbox"/> 同僚医師に相談	<input type="checkbox"/> 同僚看護師に相談
<input type="checkbox"/> 上級医師に相談	<input type="checkbox"/> 上級看護師に相談
<input type="checkbox"/> 添付文書で自分で調べる。	<input type="checkbox"/> その他専門書で自分で調べる。
<input type="checkbox"/> 添付文書で周りと相談して調べる。	<input type="checkbox"/> その他専門書で周りと相談して調べる。
<input type="checkbox"/> インターネットで自分で調べる。	<input type="checkbox"/> 担当病棟薬剤師のピッチに連絡する。
<input type="checkbox"/> インターネットで周りと相談して調べる。	<input type="checkbox"/> 調剤・注射調剤室へ連絡する。
<input type="checkbox"/> ドラッグインフォメーション(DI室)に連絡する。	

【薬剤関連業務に関する分担に関して(複数回答可)】

A. 以下の質問のうち、医師、看護師、薬剤師のどちらが本来すべき業務だと思うか選んで下さい。

1. 医師	2. どちらかという医師	3. 看護師
4. どちらかという看護師	5. 薬剤師	6. どちらかという薬剤師

B. 並びに、それぞれの役割分担の選択で何を重視したかを下記の中から選び、枠組みのなかに対象となる数字を入れて下さい。

1. 薬に関する専門的な知識	2. 疾患や病態に関する知識	3. コミュニケーション能力
4. 業務効率	5. 手法や経験に関する	6. 現状で満足

1) 持参薬確認

A	
B	

2) 処方確認

A	
B	

3) 配薬準備

A	
B	

4) 配薬

A	
B	

5) 薬剤説明

A	
B	

6) 服薬確認

A	
B	

7) ミキシング準備

A	
B	

8) ミキシング

A	
B	

9) 注射実施

A	
B	

10) 注射後観察

A	
B	

11) ルート管理

A	
B	

12) フィジカルアセスメント

A	
B	

13) TDM採血

A	
B	

14) 薬剤管理方法の決定

A	
B	

15) 薬物療法提案

A	
B	

16) 相互作用の確認(2種類以上の薬において)

A	
B	

図1 今回の調査に使用したアンケート用紙

かにすることを目的として、本研究を開始した。

方法

本研究におけるアンケート調査は、2015年4月1日～6月30日の期間に実施した。アンケート調査は、自記式、無記名の調査票を作成して実施した(図1)。

対象は、当院の医師92名(常勤医師のみ)及び看護師380名(外来看護師・手術室看護師を除く)であった。

病棟薬剤師に対する相談・質問内容や、病棟薬剤師不在時に使用するツール、薬剤関連業務に関する役割分担などに関する設問については、得られた回答を医師と看護師に分けて解析し、それぞれの観点の違いについても考察した。

なお、結果の誤差範囲を示す必要がある場合には、平均値±標準偏差で示した。統計解析にはExcel2010のt検定(分散が等しくないと仮定した2標本による検定)ならびに χ^2 検定を使用し、両側検定で $P<0.05$ の場合を統計学的に有意差ありとした。

本調査は、当院医療倫理委員会の承認を受け、病院長の許可を得て実施した(受付番号:307)。なお本調査は当院職員に対する無記名の調査であり、回答用紙の提出をもって同意を得たものとした。また、無記名式のアンケートであることか

ら、回答の段階で匿名化されており、当院職員の個人情報保護は担保された。

結果

アンケート回収率は医師41.30%(38/92)、看護師92.11%(350/380)、医師+看護師82.20%(388/472)であった。看護師からのアンケート用紙の回収は、作業の都合上病棟単位に行った。回収率については1病棟のみ73%であったが、それ以外の11病棟はいずれも80%以上であり、そのうち4病棟では100%であった。医師の当院所属平均年数は6.82年、職業経験平均年数は14.08年であった。看護師の当院所属平均年数は7.93年、職業経験平均年数は10.66年であった。

病棟に薬剤師が配置されていること(病棟薬剤師)を知っていると答えた割合は医師94.74%(36/38)、看護師98.86%(346/350)、全体で98.45%(382/388)であった。

まず、病棟薬剤師を配置する契機となった病棟薬剤業務加算の算定について、その認知度を調査した。その結果、知っている割合は医師44.73%(17/38)、看護師35.14%(123/50)、全体で36.08%(140/388)であった。病棟薬剤業務加算を知っていると答えた医師の当院所属平均年数は 9.65 ± 6.6 年、職業経験年数は 19.06 ± 7.67 年であり、知らない割合は医師の当院所属平均年数は 4.52 ± 5.07 年、職業経験年数は 10.05 ± 10.47

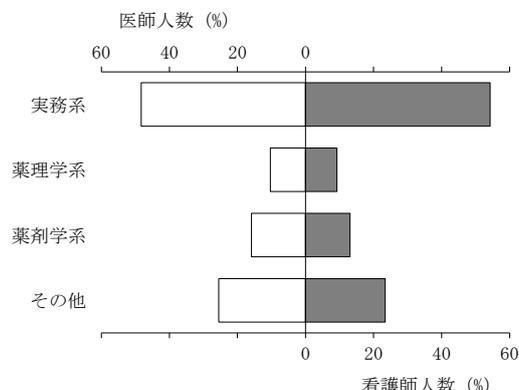


図2 医師・看護師から薬剤師になされた相談・質問の分野別割合

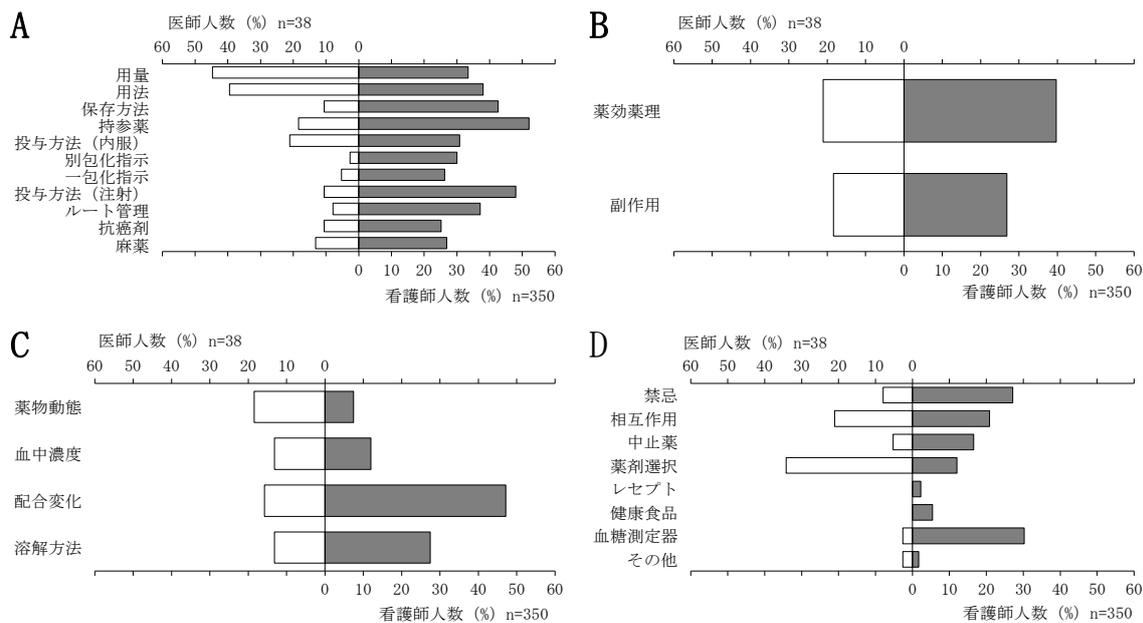


図3 医師・看護師から薬剤師になされた相談・質問の割合
 A：実務系の質問，B：薬理学系の質問，
 C：薬剤学系の質問，D：その他の分野の質問

年であった。病棟薬剤業務加算を知っていると答えた看護師の当院所属平均年数は 11.39 ± 10.23 年、職業経験年数は 15.67 ± 11.08 年であり、知らないと答えた看護師の当院所属平均年数は 6.09 ± 6.09 年、職業経験平均年数は 7.99 ± 7.61 年であった。病棟薬剤業務加算を知っていると回答した医師・看護師の所属平均年数・職業経験年数と知らないと回答した医師・看護師の所属平均年数・職業経験年数とでは有意な差が見られた (t 検定において、医師所属平均年数: $P < 0.03$ 、医師職業経験年数: $P < 0.01$ 、看護師所属平均年数: $P < 0.01$ 、看護師経験年数: $P < 0.01$)。

続いて、病棟薬剤師と医師・薬剤師の関わり方を知る目的で、どのような相談や質問を薬剤師に行っているかを調査した。薬物に関する相談・質問を病棟薬剤師にした経験の割合は、医師 68.42% (26/38)、看護師 85.14% (298/350)、全体で 83.51% (324/388) であった。医師と看護師との間に相談内容に応じた相談者数の変化があるかどうかを調べるために、質問項目を薬学における実務系・薬理学系・薬剤学系・その他という分

野に沿って大きく 4 つに分類した。それぞれの項目ごとの延べ相談者数の割合を算出して、分類した項目ごとの回答者の割合をあらわしたものが図 2 である。このような分野別の分類では、医師と看護師の質問内容に大きな差はみられなかった。

さらに各相談・質問の項目ごとの回答者の割合を集計したものが図 3 である。図 3A に示したように、医師では用量・用法に関する相談・質問の割合が高く、次いで投与方法 (内服薬) や持参薬に関する質問の割合が高かったが、別包化や一包化指示に関する相談・質問の割合は低かった。一方、看護師では医師と比較すると、持参薬と投与方法 (注射) に関する相談・質問の割合が高かったが、今回アンケート用紙で提示したすべての種類の相談・質問が、ほぼ均等になされていた。

同様に、薬理学系の相談・質問が図 3B、薬剤学系の相談・質問が図 3C である。薬理学系の相談・質問については、医師よりも看護師の方が、相談・質問をした人の割合が高かった。薬剤学系の相談・質問では、看護師は配合変化に関する相

表1 病棟薬剤師に対して薬の質問または薬以外の質問をするという回答と、病棟薬剤師の存在が業務負担軽減につながるという回答の関連性

医師		負担軽減 (実数)			負担軽減 (期待値)			χ^2 検定 (P値)
		なっている	なっていない	合計	なっている	なっていない	合計	
薬の質問	ある	21	5	26	19.2	6.8	26.0	0.1443 (N.S)
	ない	7	5	12	8.8	3.2	12.0	
	合計	28	10	38	28.0	10.0	38.0	
医師		負担軽減 (実数)			負担軽減 (期待値)			χ^2 検定 (P値)
		なっている	なっていない	合計	なっている	なっていない	合計	
薬以外の質問	ある	7	2	9	6.6	2.4	9.0	0.7495 (N.S.)
	ない	21	8	29	21.4	7.6	29.0	
	合計	28	10	38	28.0	10.0	38.0	
看護師		負担軽減 (実数)			負担軽減 (期待値)			χ^2 検定 (P値)
		なっている	なっていない	合計	なっている	なっていない	合計	
薬の質問	ある	263	35	298	256.3	41.7	298.0	0.0036**
	ない	38	14	52	44.7	7.3	52.0	
	合計	301	49	350	301.0	49.0	350.0	
看護師		負担軽減 (実数)			負担軽減 (期待値)			χ^2 検定 (P値)
		なっている	なっていない	合計	なっている	なっていない	合計	
薬以外の質問	ある	131	15	146	125.6	20.4	146.0	0.0892 (N.S.)
	ない	170	34	204	175.4	28.6	204.0	
	合計	301	49	350	301.0	49.0	350.0	

談・質問の割合が高く、次いで溶解方法に関する相談・質問の割合が高かった。薬物動態や血中濃度に関する相談・質問の割合は医師とほぼ同程度であった。その他の質問(図 3D)では、医師は薬剤選択に関する相談・質問をした人の割合が高く、次いで相互作用に関する相談・質問の割合が高かった。看護師では、血糖測定器、禁忌、相互作用の順であった。

薬物以外に関する相談・質問を病棟薬剤師にした経験の割合は、医師 23.68% (9/38)、看護師 41.71% (146/350)、全体で 39.95% (155/388) であった。なお、自由記述欄に書かれた内容から、その他の相談・質問は、日常会話、栄養管理、患者の心理的要因、患者背景、病院特有のルール、看護必要度などであった。

病棟薬剤師の配置は、薬剤関連業務を薬剤師が行うことにより、医師・看護師の負担を軽減することが期待される。そこで、薬剤師の病棟配置が医師・看護師の業務負担軽減につながっているかについて尋ねた。その結果、業務負担軽減となっていると答えた人の割合は、医師 73.68% (28/38)、

看護師 86.00% (301/350)、全体で 84.79% (329/388) であった。

今回の調査では、薬剤師に相談・質問をした経験の有無と、病棟薬剤師の存在が業務負担軽減につながるか否かについて、いずれも二者択一で尋ねたため、個々の回答から両者の相関を示すことはできなかった。そこで、病棟薬剤師に対して薬の質問または薬以外の質問をするという回答と、病棟薬剤師の存在が業務負担軽減につながるという回答との間に関連があるか否かについてクロス集計を行い、 χ^2 検定を用いて統計学的有意性について検討した(表1)。

医師については、薬に関する質問の経験の有無に関して見ると、薬の質問をしたことがあり、病棟薬剤師が医師の業務負担の軽減になっているという人数は最も多かったが(21/38)、薬に関する質問の経験と業務負担軽減との間に統計学的有意性はなかった。また、薬以外の質問をしたという経験の有無についても、医師の業務負担軽減との間に統計学的有意性はなかった。

看護師については、薬に関する質問の経験の有

表2 医師・看護師が希望する薬剤師の病棟滞在時間

	医師	看護師
0~1時間	2.6%	7.7%
2~3時間	21.1%	16.6%
4~5時間	5.3%	7.7%
6~7時間	2.6%	1.4%
8~9時間	5.3%	8.6%
10時間以上	0.0%	0.6%
できるだけ多く	10.5%	14.3%
未回答	52.6%	43.1%

アンケートに回答のあった医師人数 (n=38) または看護師人数 (n=350) に対する割合で表示した。

無に関して見ると、薬の質問をしたことがあり、病棟薬剤師が看護師の業務負担の軽減になっているという人数は最も多く (263/350)、薬の質問をした経験と病棟薬剤師が看護師の業務負担軽減との間には、統計学的に有意な関連があることが示された。一方、薬以外の質問をしたという経験の有無は、看護師の業務負担軽減とは統計学的に有意な関連はないことが示された。

引き続き、薬剤師が病棟で活動する時間的なニーズについて調査した。薬剤師がどれくらいの時間病棟で仕事をする必要があるかという問いに対し、表2に示したような結果が得られた。最頻値は、医師・看護師とも2~3時間で、平均値は、医師で平均3.64±2.34時間 (14/38)、看護師で平均3.92±3.09時間 (149/350)、全体で3.90±3.03

時間(163/388)であった。一方、全体で44.07% (171/388) が回答なしであった。具体的な時間を示さず「頻回・できるだけたくさん」と書かれた回答が13.92% (54/388) あった。

当院の薬剤師の勤務時間は通常8:30~17:30で、病棟勤務は1日のうち4~5時間である。日中に病棟を不在にする時間にはPHSで対応するようにしているが、対応困難になる場合もある。さらに、夜間や休日は、病棟に薬剤師が不在となる。このような場合に、どのようにして問題を解決しているかという問題解決ツールについて尋ねた (図4)。医師が使用する解決ツールでは、調剤室・注射調剤室への電話 (25名) が最多であり、次いで、自分でインターネット検索 (23名) や添付文書を調べるケース (22名) が多かった。看護師では上級看護師への相談 (225名) が最多であり、次いで、調剤室・注射調剤室への電話 (193名)、病棟担当薬剤師のPHSに電話 (173名)、自分でインターネット検索 (139名)、同僚看護師に相談 (134名)、インターネットで周りの者たちと相談 (121名) が多かった。

最後に、薬剤関連業務について、どの職種が行うのが妥当であるか医師・看護師へ尋ねた。

「医師」・「どちらかという医師」をまとめて「医師」、「看護師」・「どちらかという看護師」をまとめて「看護師」、「薬剤師」・「どちらかとい

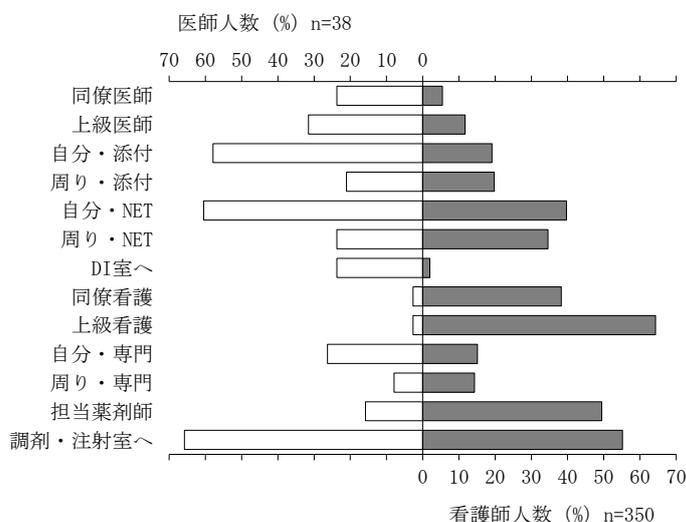


図4 医師・看護師が使用する病棟薬剤師不在時の問題解決ツール

うと薬剤師」をまとめて「薬剤師」とし、それぞれの業務について、医師・看護師・薬剤師のいずれが行うべきと考えているかの割合を求めた。

医師が、薬剤師が行うべき業務と考えている割合の高いのは、持参薬確認 (75.61%)、処方確認 (62.50%)、配薬準備 (47.37%)、薬剤説明 (84.62%)、ミキシング準備 (78.79%)、ミキシング (57.58%)、薬物管理方法の決定 (75.00%) であった。配薬準備・ミキシングに関しては看護師が行うべきと考えている割合 (52.63%・42.42%) と薬剤師が行うべきと考えている割合 (47.37%・57.58%) とがほぼ等しかった。フィジカルアセスメントに関しては、医師が行うべきと考えている割合 (40.00%) と看護師が行うべきと考えている割合 (54.92%) がほぼ等しかったが、薬剤師が行うべきと考える医師の割合は非常に少なかった (5.71%)。以上のような役割分担を選択する際に医師が重視した理由として、持参薬確認・処方確認・薬剤説明・ミキシング準備・ミキシング・薬物管理方法の決定は薬の知識、配薬準備は業務効率を選ぶ割合が最も高かった。

看護師が、薬剤師が行うべき業務と考えている割合の高いのは、持参薬確認 (67.55%)、処方確認 (36.78%)、薬剤説明 (94.60%)、ミキシング準備 (57.64%)、ミキシング (66.19%)、ルート管理 (50.86%)、薬物管理方法の決定 (58.43%)、薬物治療の提案 (40.86%)、相互作用の確認 (65.21%) であった。処方確認・薬物治療の提案に関しては医師が行うべきと考える割合 (40.60%・56.09%) と薬剤師が行うべきと考える割合 (36.78%・40.86%) がほぼ等しかった。ミキシング準備・ルート管理に関しては、看護師が行うべきと考える割合 (40.92%・47.56%) と薬剤師が行うべきと考える割合 (57.64%・50.86%) がほぼ等しかった。以上のような役割分担を選択する際に看護師が重視した理由として、持参薬確認・処方確認・薬剤説明・薬物管理方法の決定・薬物治療の提案・相互作用の確認に関しては薬の知識、ミキシング準備・ミキシングについて業務効率、ルート管理

については手技や経験を選ぶ割合が高かった。

考察

病棟薬剤業務の実施状況や他の医療職種からの評価については、さまざまな形の調査が行われている²⁻⁷⁾。また、特に導入期にあつては、病院薬剤師会主導の大規模調査なども実施された⁸⁾。これらの調査に共通するのは、病棟薬剤業務の意義であるが、一方で、職種間での意識の違い³⁾についても指摘されていた。病棟薬剤業務実施加算の取得には「マンパワーの確保や業務改善等が必須となってくる」⁸⁾こともあり、他院での調査結果がそのまま当院に当てはまらないことも考えられることから、当院における病棟薬剤業務について、医師・看護師からの評価を知るためのアンケート調査を実施した。

結果に示したとおり、今回のアンケート調査の回収率は、医師 41.30%、看護師 92.11%であり、それぞれの職種からの評価を十分に反映できるものと考えられた。

病棟薬剤師が各病棟に配置されていることを知っている割合は全体で 98.45%と高い値を示したにも関わらず、病棟薬剤業務加算について知っている割合は医師・看護師ともに低く、全体で 36.08%であった。薬剤師が病棟で活動することは日常の業務において意識していても、それが加算を通じた経済的貢献にもつながっていることまでは浸透していないと考えられる結果であった。一方、医師・看護師ともに、病棟薬剤業務加算について知っている人たちは、知らないと回答した人たちと比較して、当院所属平均年数及び職業経験年数が有意に高かった。これらより、年齢ないし経験年数を経た医療従事者の方が経済的な貢献についても関心が高いものと考えられた。

医師・看護師を通じて、薬物に関する相談・質問を病棟薬剤師にしていた人の割合は、約 84%と多数を占めた。しかし、約 64%の人は、病棟薬剤業務加算を知らないと答えていた。この結果は、医薬品の専門家としての薬剤師に対する信頼と、

病棟薬剤業務の経済的貢献に関する認知度とは、必ずしも平行するものではないことを示唆している。今後、薬剤師の業務内容や院内における役割や経済面も含めた貢献について、他職種の人たちに理解されるような活動を行うとともに、その内容についてもさらなる検討を行うことが必要であろう。

薬剤師に対する相談・質問の内容を分類・集計した結果、医師と看護師では異なる傾向があった。看護師は全体的に医師よりも相談・質問をする人の割合が高いものが多かったが、中でも、医師が相談・質問する割合よりも看護師が相談・質問する割合が20%以上多かったのは、保存方法、別包装指示、一包装指示、投与方法（注射）、配合変化、血糖測定器であった。これに対し、看護師が相談・質問する割合よりも医師が相談・質問する割合が20%以上多かったのは、薬剤選択であった。看護師の相談・質問は、患者のQOL改善に関わるものが多い傾向があり、医師は薬物治療に必要な情報を薬剤師に求める傾向がうかがえた。

病棟薬剤師に対して薬の質問または薬以外の質問をするという回答と、病棟薬剤師の存在が業務負担軽減につながるという回答との間のクロス集計を行ったところ、看護師の場合のみ、薬剤師に薬の質問をした経験と病棟薬剤師の存在で看護師の業務負担が軽減されるということの間に、有意な関連があることが示された。直接患者と接する看護師には、様々な医薬品に関わる業務が発生し得る。患者から看護師に直接薬の質問が行われる場合も少なくない。そのような場合に、病棟に薬剤師が常駐することで、看護師の負担軽減につながっている可能性がある。一方、医師については、業務負担の軽減と薬剤師への質問との間に有意な関係を見出すことができなかった(表1)。

真野ら²⁾は、薬剤師が医薬品に関する質問に回答することによって処方変更などの薬学的介入が生じることで病棟薬剤師の存在価値を示すことが出来たと報告している。しかし、今回のアン

ケートは、業務負担という観点からの設問であったため、処方変更などについては調べることができなかった。医師のアンケート回収率を高めることと合わせ、今後の課題である。

医師・看護師が病棟薬剤師に希望する1日あたりの病棟勤務時間については、平均1日3.90±3.03時間であった。病棟薬剤業務加算の算定には、薬剤管理指導業務以外に、各病棟に1週間に20時間相当以上の病棟薬剤業務の実施を求められているが¹⁾、医師・看護師が薬剤師に期待する病棟勤務の時間は、算定規則に定められた時間にほぼ一致しており、また現状の勤務状況ともほぼ一致していた。

病棟薬剤業務が充実しても、人的資源に限られる以上、薬剤師不在時に生じた問題に対して、医師・看護師がどのようにそれに対処するかということは、重要な課題となる。そこで今回は、薬剤師不在時に問題を解決する手段について尋ねた。

医師の場合、調剤室・注射調剤室へ電話をする割合が最も高く、次いで自分でインターネットもしくは添付文書を調べる割合が高かった。看護師の場合、上級看護師に質問、調剤室・注射調剤室へ電話、病棟担当薬剤師に電話の順であった。看護師に比較して、病棟担当薬剤師に連絡する医師の割合が低かったことは、病棟薬剤師の役割の医師に対する周知がまだ十分ではないものと考えられた。また、医師・看護師とも、DI室を選択した人の割合が低く、特に看護師において低かった。薬に関する情報提供という観点からは、DI室の役割は重要であると考えていたが、DI室を選択する医師・看護師の割合が低かったため、今後院内で周知すべき課題が明らかになった。

種々な薬剤関連業務について、医師・看護師・薬剤師のうち、どの職種が担当すべきかを尋ねた質問では、医師の考え方と看護師の考え方に違いが見られた。医師は薬剤説明・持参薬確認・処方確認薬物などについては薬剤師が行うべき業務と回答していたが、相互作用の確認や薬物治療の提案については薬剤師が行うべき業務とは回答

しておらず、本来薬剤師として点数化されている業務が期待されていなかった。また、それぞれの業務をどの職種が担当すべきかと考える理由についても、医師と看護師ではやや異なる傾向が認められたが、共通することとして、薬に対する知識や業務効率があげられていた。

今回の結果は、吉田らの報告³⁾とはやや異なっていた。特に薬剤管理方法の決定という選択肢については、吉田らの報告³⁾では医師・看護師においてそれぞれ14.9%、12.3%であったが、本研究では、それぞれ75.00%、58.43%であった。なお、吉田らの報告³⁾は病棟薬剤業務加算開始前の調査であったことから、今回の結果が異なった傾向となったことが考えられた。

病棟に薬剤師が活動するようになり新しい病棟薬剤業務が多く行われており^{5,6)}、職域は広がってきている。しかし、実際には医師・看護師が期待しているものと、薬剤師がなすべきと考える業務との間には、ずれがある可能性がある。そのようなずれを埋めていくことで、本研究の成果を今後の病棟薬剤業務の改善に生かしていきたい。

利益相反

全ての著者は、開示すべき利益相反はない。

引用文献

- 1) 一般社団法人 日本病院薬剤師会「薬剤師の病棟業務の進め方 (ver.1.2)」, 2016年10月20日, <<http://www.jshp.or.jp/cont/16/0609-2.pdf>>
- 2) 真野泰成, 西上潤, 打和壽子, 井野秀一, 岡田俊英, 馬渕宏, 宮本謙一: 病棟スタッフからの質問とそれらに対する薬剤師による薬学的対応, 医療薬学, 31, 679-685 (2005)
- 3) 吉田弥生, 岡橋孝侍, 野田能成, 三上正, 柿原浩明, 石田司, 近藤靖之, 三木生也, 水野成人: 薬剤師の病棟薬剤関連業務に関する医療従事者への意識調査, 医療薬学, 37, 591-598 (2011)
- 4) 高山明, 小松早恵, 今西孝至: 病棟薬剤師に対する病棟薬剤業務の認識に関する調査—薬剤管理指導業務と差別化を中心に—, 日本病院薬剤師会雑誌, 51, 1095-1099 (2015)
- 5) 藤原久登, 濃沼政美, 湯本哲郎, 前田拓哉, 上手真梨子, 河原英子, 添田真司, 瀧本淳, 田村和敬, 中村雅敏, 金田光正, 高尾良洋, 齋藤昌久, 加賀谷肇, 村山 純一郎: 回復期リハビリテーション病棟における薬剤師常駐の必要性と医師・看護師の潜在的なニーズの探索, YAKUGAKU ZASSHI, 135, 969-975 (2015)
- 6) 稲葉健二郎, 濃沼政美, 小林求, 湯本哲郎, 赤瀬朋秀: 中規模病院における薬剤師病棟常駐の有用性に関する研究 (第1報) —当院における薬剤師の病棟常駐に対する医師・看護師ニーズの探索—, 日本医療経営学会誌, 8, 37-43(2014)
- 7) 足立恵子, 藤田和也, 伊藤正泰, 畑中由香子: 病棟薬剤師によるリスクマネジメント効果～病棟薬剤業務におけるリスク回避と医師・看護師の評価～, 医療薬学, 40, 8-16 (2014)
- 8) 一般財団法人 大阪府病院薬剤師会 「病棟薬剤業務に関するアンケート」結果報告, 2013年6月, <<http://ohp.or.jp/publication/post-14.html>>